

To have or to be

～明治学院の地震対応～

3・11 東日本大震災は、地震そのものの被害ばかりでなく、大津波の襲来や火災によって広範囲にわたり甚大な被害をもたらしました。また原発事故が起こり、放射能汚染の問題が日本ばかりでなく世界をも震撼させ、残念ながら人災による被害も大きかったと言わざるを得ません。15,000 人を超える方々が命を落とされ、未だに多くの方の行方不明が伝えられ、震災の被害の大きさをあらためて思い心が痛む毎日です。

農水省は、宮城県など3県で約2万ヘクタールの農地が、津波で海水につかって使えなくなっていることを明らかにし、塩分の除去や溜池や水路など、農業用施設などを整備し復興するには数年かかるとしています。

また、漁船や漁港の多くが損壊し、養殖施設も全滅し、水産関係者は完全復興まで10年以上を要するとみえています。商工業施設も被災し徐々に改善を見ているものの、製品の品不足や流通の混乱が生じました。

地震当日の本校は、学年末試験後の授業が行われない採点日であり、補習講習や部活動の為に生徒198名が在籍していました。教職員で生徒たちの安全と被害状況の確認を行いました。人的物的被害は見受けられませんでした。都市ガスの遮断、エレベーターの停止はありましたが、停電にはならず水道が止まることはありませんでした。徒歩・自転車通学の生徒は、通学路の安全を確認できた者から帰宅させ、電車通学生徒は鉄道の運行再開まで学校に待機させました。学校HPの「重要なお知らせ」欄を通して、可能ならば生徒を迎えに来ていただきたいと保護者に要請し、結局、生徒58名、教職員13名が学校に宿泊することになりました。2003年度に地震災害対応マニュアルを作成、それに基づいて700名が3日間学校に避難生活できるだけの備蓄がありましたので、水や食料や寝具を配布しました。また、阪神淡路大震災を経験された保護者が握り飯をたくさん届けてくださり、恐れと緊張の中にあった学校が和む瞬間もありました。翌日の昼までには、総ての生徒が無事に下校しました。その後の修了式、新入生のガイダンス、補習講習などは、安全や交通機関の運行状況を確認しながら、また計画停電の合間を縫って、予定通り行うことができたのは幸いでした。現在は、1300名が3日過ごせる体制を整えています。

このような状況の中で、「持つものが少なければ少ないほど、多く愛することができるのである」という言葉が浮かびました。『生きるということ』（エーリッヒ・フロム著 紀伊国屋書店）という本の中で出会った言葉です。原題は『To have or to be』で「持つ」と「ある」とは人間の二つの基本的な生き方であるということです。そして、生きること=have（所有すること）が日常生活の中で重視される傾向があり、本来の生きること=to be（存在すること・自分らしくあること）が失われつつあることに警告を発しています。地震によって多くのものを失い困難の中にある今だからこそ、私たちは今も「ある」ことの意味を真剣に考え、「愛」に生きる時を過ごさなければならないのではないのでしょうか。

明治学院中学校・東村山高等学校
校長 和田道雄

